

戸一の
玲断
太郎面

4 論人同木の椎

蘆と二つの白き
鳥と

莊原 照子

赤葉楓林落酒旗、白沙洲渚夕陽微
聲柔檢若茫外 何處江村人夜歸。僧道浪

一戸氏の御勞作の数々から秀篇(林の序)に至りふま此の古詩を想起した。(何處江村人夜歸)
獨憐幽草潤邊生 上有黃鸝深樹鳴 春潮帶雨晚來急 野渡無人舟自橫。韋應物作。

(舟)の抒情は亦私を此の遠き曠景に呼び返すのだつた。(野渡人無くて舟自ら横ふ)韋應物。彼には李白や杜牧の華麗豪華な王維の優婉な感性も無い。併し何物にもまして「精神」の詩人「高節」と「素純」の詩人である。ここでモラリテの問題にふれたいが頁が許さぬ。それは「反自性」のそれに繋る事も多いとするなら。現實的に詩の上にモラリストのこの古人と詩人をして(既に在るモラリテ)への反逆その苦悩の路を敢て選ばれた氏との間に正しく時代の大河が一條白く横つてゐた。此の物思ふ獨逸的な植物はロココ風飾り家具に背をむける。金魚を扼殺し眞珠を酸漬づけにし薔薇色のガウンを丸焼きにして啖べる。倫敦塔の地下室に斧を磨く黒い天使達の合唱は神も是を宜しとみそなはず。(惡の華)とは遂に(善の華)の別名だ。その序は神にふ

れその曠はなほ懸靈を追ひ乍ら然も氏は今黄金の舟に揺られつつ遙かな宵明りの雲の旗手に母國の村落の白い煙を見出たされた。そしてかく美しくつぶやかれるのである。(歸去來。歸去來)最後に此の揺るぎなき北方の將の御榮冠を祈りつつ私は亦一つ水邊の古詩を書き止めさせて置く。
江頭落日照平沙 潮退漁船開岸斜 白鳥一雙臨水立 見人驚起入蘆花。 戴復古作。

此人を見よ

藤村 誠一

一戸冷太郎氏は『椎の木』同人でも詩壇的に相當の先輩である。然るに左程持ち上げもせず、持ち上りもせず、知る人のみぞ知るで致々として詩作してゐる、斯ふ云ふ男は通常生きてゐる間は餘り有名になれない、年齢から言つて、そして當時の『日本詩人』時代の詩人で今頃詩

壇の中堅どころに居る人々を充分肩を並べて其さうな筈の此男が、未だ其等の人達から一人外れて、若い連中に交つて先聲願一つせずと現役の一兵卒で唯唯諸語してゐる詩業こそは、昨今成り上りのヘツボコ少尉殿共の鍍金のサーベルをガチヤつかしてゐる手合の多い中で、掌を合して拜みたくなる程の尊さを覺える。この人を吾々の雜誌に持つてゐるさいふ事は、勿論百田氏の徳の到す所でもあらうが、大いなる力強さ誇りを感じてよるしい。例へば最近亡くなつた大手拓次氏などは、曾ては厚星、朝太郎氏等と並び光つてゐた人だつたのに詩壇的野心の乏しさから、左程詩人としての名も出さず詩集一つ著さずに他界したが、この型の詩人は、そのやうに非常に稀である。それが、詩壇的經歷で相當長い男でも、中途で書かなくなつたり、時に思出したやうに書いたりする氣紛れ者達と違つて、只あく事なく、こつこつ續けてゐる一戸氏などは、流石に回顧的な事もなければ、濟ましたさころもない。さるをさうでない前述の如き氣紛れ者に限り、たいした手柄話でもない鼻持ちならぬ懐舊談

や、乙に先輩面を脹らしては發作的な詩を泡のやうに書いてゐる先輩が無いさも言へないのだから、後輩も情けない時がある。
愚生などひたすらに一戸氏を見習つて持前の氣短から、焦つてみたり、山氣を出したり、憤慨したり、悲視したりすることなく、精々、内に内にと勉強し實力の涵養に努めたいさ願望する次第である(作品評は又の機会として 此處では故意にきけた)

私信として

内田 忠

一戸君には二つの作風があるやうである。それは前號『椎の木』の「輪廻」の如き多少事實に即した作と『詩抄』の「諸篇」の如き觀念を主とするものとであるこれらの二つの傾向は誰れにでも多少はあり、詩人はこの二つの間を絶えず左右

してゐると見ても差支へない。事實に捉はれれば小説風になり、構成としての面白さはなくなる。觀念に走れば類型に陥りやがては陳腐の譏を免れない。要は二つの中道を進むことである。しかしどちらか云へば觀念の驅使は詩の大部分を占むべきであらう。
僕は批評の役目を果す爲に、一戸君の作を大部分に渡つて讀み直した。昭和七年時代の物は概れ前者に厝し、九年時代のもの(後者に屬する物が多い。君の氣概は冷徹であるが筆は奔放すぎる。「輪廻」の最後の一行などそれを示してゐる君の紋章は「悍星の座」の中にあるのだらうか、それとも「輪廻」の上にあるのだらうか。僕はこの二つの貌のあまりにも異なるのに驚く。そしてそれは僕自身の願でもあるのだが。しかし詩人の仕事がよく一行を見出すのにあるとしたら、君の詩から寶珠を拾ふ事は困難な事ではない。僕には何故か「夜夜」前後の作品が好ましい。「眠れない夜がまたも私を埋め去つた。むしろ此の蠟燭は吹き消さう。そして私は夜を吸ふ、それが身のうちから溢れ出るまで」

そのグリムプス

高祖 保

そこにわたしはあるタイプの「叫ぶ人」
をかたどつてみる。眠れない夜を抱へて
内省的な思念のディレンマにうめく。テ
イビカルな北方の人をかどつてみる、聖
書の羊皮紙の上に手をさしおいて、白い
エホバの聲を嘲つてゐる、鶴のやうな瘦
身の宗教的感情の所有者をかたどつてみ
る。その人は、内部世界の樞軸をめざし
て足掻きながら、いつか奥ぶかい現實世
界への陥穽に、その片足をふみ外して、
立脚する領域の精神的な二元視にさらに
その苦惱をふかめつつある人。前者の代
表的傾向として作品「夜々」を、後者に
「錯亂の頁」のさかんなる北方精神を指摘
したい。そこにわたしはこの詩家のアク
テイヴな内向性の純潔をかたどること
ができる。一戸氏の作品からたちのぼる
風格は、この純潔さのゆゑに、バアンナ
ルな生地 of 親密さを匂はせ、わたしを曳

きつける。そこでわたしには思ひ浮べる
ひさくだりがある。一九〇九年、ホオル
・クロオデルがフイリツツに筆をさつた
あのひさくさを一戸氏に耳打ちしたい。
（——あきらかに語つてくれよ。今はわ
が身も苦悶の時、私は額に汗して御身の
言葉に耳を深ます）
一戸氏はその背後に、どこか日本象徴
詩派の仰を羽織つてゐるやうなふしがあ

る。それはこの詩家の筆をさること久し
い歴史が編みだす、織模様のおのづから
なる持味ではあらう。今やその罪老いん
さする一戸氏の久しい詩的精神をかきた
てるために、心そこからの「はなむけ」
さして、かばかりながらこの一欄をしつ
らへたのにすぎない。——好ましいいわた
しの詩人よ、希くば起ちあがれ！

岡崎清一郎氏の[宅火]

わたしはかうした場合を氏においてのみ感ずる——それは夥し
い古典思想のフラグメンタルな表象が、氏の体内にひさたび吸収さ
れるや否や、たちまち氏の妖しい文學感覺さ、凄じいデフォルマシ
ョンの氣流に變色させられて、ユニクな「岡崎清一郎」タイプに
豹變することだ。これは氏のクラシックに基礎づけられた漂渺たる
エゴイズム（エゴイズムではない）の神視さいつたものに根ざして
ゐるかとも思はれる。それは詩人のひとつの嗜好に根ざした精神現
象さいふべく、あまりに強靱すぎるものがある。それは心理現象の
世界に浮動する「情趣」の搖曳するものでは、もはやない。それは
古典思想に妖しい氏獨特のミスナシズムが感服して發する、エゴチ
ズムの火花さいひたい。氏が吐きだす、神韻をもつたゾオキヤビユ
ラリーにふり撒かれて、あの片假字がもつ嚴格な尖銳感をもつたス
マイルは、まさしく氏の獨歩する領域さいふよりほかはない。この
渾手鼠の冊子に入れるに惜しいほど重畳感のある三十二篇で、近來
重厚性の乏しい詩壇にこれは稀れなる一書だ。（高祖）